

TCVV 白書

総力特集：アイドル声優と声優アイドル
特別記事：来たる AI 時代の声優の未来

The TCVV Whitepaper 2023 NO. 23



声優は Visual に出るな！宣言 Ver1.11

声優は Visual に出るな会議 決議第 00000 号

声優は映画俳優・舞台俳優に比べ声だけで勝負をするという過酷な生業である。
映画・舞台俳優は身振り手振りが付加されるので視覚に訴えることが効く。
が、声優はそうは行かない。だからこそ高度な演技力が必要とされるのではないだろうか。
現在、第四次声優ブームと言われているそうだが、何か違和感を感じずにはいられない。
最近の「声優」と呼ばれる人々は Visual、その他のメディアに頼りすぎ・出過ぎではないだろうか？
今やマーケティングでメディアを十分に活用すれば、そこら辺のお姉ちゃんでさえも CD をあつという間に売ってしまう。この状況を「沈黙のミリオンセラー」*1とは良く言ったものである。
「声優」自体が今やメディア戦略によって商品になってしまったと思う。
この戦略は聴衆を気がつかない間に購買者に変えてしまう巧みなシステムだと考える。
しかし、このシステムは本来の価値。つまり「声のプロフェッショナル」としての声優を正当に評価していないものであると言える。

舞台俳優の中には決して Visual に耐えられる人ばかりではない。
が、そのような人が舞台に立てるのは、人を引き付ける演技力を持っているためであると考える。
一方、声優の質は低下している。これは最近のアニメーションは高度な演技力を必要としないものが多くなっているからといえよう。そうなれば声優の質が低下するのは至極当然のことである。*2
従って、高度な演技を必要とする作品では声優の能力の限界が露呈してしまう。
例えば、劇場版新世紀エヴァンゲリオン最後の最後はアスカのほんの一言で終わる。*3
しかし、この台詞は始めに用意してあったものとは違うものであったようだ。
本来は「あんたばか？」であったようだった。が、声優の力量不足のため、結局「気持ち悪い。」へと変更を余儀なくされた。
完全に声優が役に負けてしまっていたのである。
結果、作品は中途半端に仕上がってしまい損害を被ったのは我々聴衆者である。

声優が新境地を求めるのもいい。しかし、声優も役者であるのだからまず足場を固めてから進出するのが筋と考える。
我々は、健全な日本アニメ・マンガの質を守るため、ここに「声優は Visual に出るな！」を宣言する。

*1 誰もが知っている訳でもないのに 100 万枚以上売ったレコード・CD のこと。一昔前は 100 万枚といたら大部分の人がその曲を知っていた。

*2 劇場版 Evangelion のパンフレット（春、夏ともに）にて清川元夢氏はプロ意識なき声優への批判とも解釈できる発言をしている。これは非常に勇気ある発言と言える。（普通はこういう事は映画のパンフでは言わないであろう。）

*3 実は Evangelion はヲタク（庵野氏）によるヲタク批判であったことはあまり報じられていない。ヲタクの皆様はそのメッセージを受け取れなかったとのこと。（レイとシンジが列車に乗っていて会話をするあのシーンが批判部分とされている）

目次

巻頭言	4
1 第 22 回 TCVV アニメタレント短期観測調査	5
1.1 TCVV 短観概要	5
1.2 調査期間	5
1.3 集計	6
1.4 傾向分析	7
1.5 際立つ状況	7
1.6 気になる状況	8
2 『声優アワード』 Watch Vol.9	9
2.1 まえがき	9
2.2 受賞者	9
2.3 所感	9
3 声優システム論 16-声優たちはどう生きるか-	10
4 来たる AI 時代の声優の未来	12
4.1 まえがき	12
4.2 声優はどのような？	12
5 Chairman's free talk -議長放談-	13
編集後記	14

声優アイドル≠アイドル声優

本誌でも取り上げているナナブンノニジュウニ（以下、ナナニジ）。そのメンバーの一人である河瀬詩がストーカー被害にあっていたとの報道がなされ、その際に『声優アイドル』と報道された。

この声優アイドルという言葉にネット界限では俄にどよめいた。

報道で使われた「声優アイドル」というのは恐らくはナナニジが『デジタル声優アイドル』と銘打っているの
で、それを元に報道されたと考えるがネット界限ではさまざまな論考がなされたようだ。

「声優らしい活動していないのに声優を名乗るな」、「アイドル声優との違いが分からない」など云々。

TCVV では以前から『アイドル声優』と『声優アイドル』は厳密に分けて定義をしている。

再度定義を述べると、『声優アイドル』とは「活動の軸足をアイドル側に置いて声優みたいなことをする者」で
あり『アイドル声優』とは「活動の軸足を声優側に置いてアイドルのようなことをする者」としている。

要は基本的な活動の主眼をどこに置いているかの違いであると言える。もっと端的に言えば割合と言い換えて
もいい。従って定義から言えば、報道でナナニジメンバーを『声優アイドル』と言ったことに対しては我々
としては全く違和感はない。

だからと言って声優アイドルを是認しているものはない。あくまでも、存在として定義しているだけであ
る。声優アイドルは声優ではなく、アイドルであり、片手間で声優のようなことをしているので技量は疑問を
通り越して壊滅的であるとする。

一方、アイドル声優はどうか。アイドルブームに押されてソロでの活動は昨今では一時期に比べて少なく
なっているが、そもそもアイドル声優は声優としての技量という点で評価すると、不可ではないが、それ以上
でも無い。他に推す点が無いから差別化のためであるとする。

TCVV は声優アイドル、アイドル声優ともに否定的であったし、これからも否定的である。が、来る未来
においては、その存在が大きく異なってくるのではないかと考えている。

今回、本誌はそんなことをメインにお話ししたい。

1 第 22 回 TCVV アニメタレント短期観測調査

TCVV 情報管理部 調査課 短観担当

1.1 TCVV 短観概要

経済指標を示す「日銀短観（日本銀行短期経済観測調査）」のようにある期間に区切りアニメタレントの出演数を調査することにより現状の動向を分析する。

データは「しょぼいカレンダー^{*4}」から TCVV の算出基準^{*5}により機械的に抽出したものである。

集計方法は新規出演数を四半期毎に集計し合算した後、4 で除することで四半期当たりの新規出演数の平均値を算出する。この値を「短期的な活性度（単純活性度）」と定義する。

ただし、人間は忘却をする性質があるので『単純活性度』だけでは感覚に合致しないと考える。最近の出演した方がより印象が深い。そこで人間の感覚を取り入れるため過去を割り引いて考えた『感覚活性度』も同時に算出する。

具体的な算出方法は 4Q 前は出演数に 0.25 を、同様に 3Q 前は 0.5、2Q 前は 0.75 を乗ずることで重み付けし人間の感覚により近い活性度を算出する。

活性度が 1.00 以上ということはクォータ毎に平均して新規 1 本出ていることになりコンスタントに新規出演していると言える。言い換えれば『常に新しい状態』である。

順位に関しては感覚活性度を優先とし、感覚活性度が同値の場合は単純活性度で比較した。また調査結果については誌面を圧迫するため女性声優のみの調査とし上位 22 名までの掲載とした。

(標本数 女性 283 名)

1.2 調査期間

西暦 2022 年 10 月～2023 年 7 月

本調査は十分な調査をしていますが完全性を保証するものではありません。
また今後の動向については現時点でのデータからの予想です。

^{*4} <http://cal.syoboi.jp/>

^{*5} 無料地上波放送の TVA レギュラ出演のみで単発出演は除く

1.3 集計

2023 年 TCVV アニメタレント短期観測調査

順位	氏名	2023/3Q	2023/2Q	2023/1Q	2022/4Q	単純活性度	感覚活性度
1	日笠陽子	8	4	5	4	5.25	3.63
2	上田麗奈	6	6	1	3	4.00	2.94
3	高橋李依	4	5	4	4	4.25	2.69
4	内田真礼	4	5	3	4	4.00	2.56
5	上坂すみれ	4	6	2	3	3.75	2.56
6	悠木碧	3	4	4	6	4.25	2.38
6	種崎敦美	1	7	4	5	4.25	2.38
8	加隈亜衣	3	4	6	2	3.75	2.38
9	東山奈央	6	2	2	3	3.25	2.31
10	花守ゆみり	4	3	5	1	3.25	2.25
11	大久保瑠美	1	7	2	5	3.75	2.13
12	石見舞菜香	3	4	3	4	3.50	2.13
12	水瀬いのり	3	4	3	4	3.50	2.13
14	竹達彩奈	2	3	3	10	4.50	2.06
15	大西沙織	4	3	2	4	3.25	2.06
16	白石晴香	3	2	4	6	3.75	2.00
17	鬼頭明里	1	6	4	1	3.00	1.94
18	潘めぐみ	2	4	2	6	3.50	1.88
19	小松未可子	3	3	3	3	3.00	1.88
20	花澤香菜	2	3	4	3	3.00	1.75
21	M・A・O	5	2	0	2	2.25	1.75
22	黒沢ともよ	2	4	2	3	2.75	1.69
23	愛美	3	3	2	2	2.50	1.69
24	井澤詩織	2	3	2	5	3.00	1.63
25	佐倉綾音	2	2	2	7	3.25	1.56
26	芹澤優	2	4	2	1	2.25	1.56
27	楠木ともり	2	1	5	3	2.75	1.50
27	小清水亜美	2	4	1	2	2.25	1.50
29	小倉唯	1	4	1	5	2.75	1.44
30	大橋彩香	3	2	2	1	2.00	1.44
31	早見沙織	2	1	3	5	2.75	1.38
31	和氣あず未	0	4	3	4	2.75	1.38
31	金元寿子	2	1	3	5	2.75	1.38

1.4 傾向分析

注目すべき点は前回調査 (2022 年の 1 月から 12 月までの調査) から順位の入れ替わりはあったものの面子に大きい変化はなく相変わらず中堅勢が上位を独占する結果である。壁が分厚すぎる。

まさにレッドオーシャン。これからの新人はこれの中で戦って行くと思うと頑張れとしか言えない。しかも単に人気というだけではなく技量が凄まじい人が沢山いる。声優志望の者が綺羅びやかな世界だけを目指していると足元をすくわれる。

1 位は前回と同じく日笠陽子でありダントツである。前回 2 位だった竹達は大きく落した。20 位～30 位にいる新人が今後 10 年に上がって来そうと予想はしているものの層が薄い感じもする。

1.5 際立つ状況

1.5.1 日笠陽子

前回調査同様、今回も 1 位。もはや不動の王者と言ってもいい。この位置をいつまで維持できるのか注目したい。

1.5.2 上田麗奈

前回圏外からの大躍進。昨今は特徴ある弱々しい感じの声や柔らかい感じの声の役での主演が多いが、他方力強い方の声での出演もいつくか演じている。ただ、そちらの方は需要が少ないようだ。

1.5.3 高橋李依

「それが声優」の時代から考えられない位の大躍進。引っ張りだこになっている印象があり、ヒット作に次々主演しているが、これまでの統計からこの後の反動が気になるところ。

1.5.4 上坂すみれ

前は順位がかなり下位であったが今回は大躍進している。以前からキングレコードの下支えがあるものの、最近はそればかりではない傾向が強い。

1.5.5 種崎敦美

下積み時代が長く、ここ数年で様々な作品に出て実力が評価されている。大人しい少女の声から無邪気な子供の声まで広く出せるのが需要につながっていると考ええる。

1.6 気になる状況

1.6.1 石見舞菜香

前回から若干順位を落したが分厚いベテラン・中堅の中で健闘している。ただ声色が単調なのが今後の弱みとなりそう。

1.6.2 愛美

前回から大幅順位アップ。キングレコードと響による強力なバックアップによりブシロード系アニメやキングレコード系アニメで出演数が伸びている。特に最近ではキング系アニメの主題歌を歌うことが非常に多い。久々に見るゴリ押し状態ではないかと思う。

1.6.3 黒沢ともよ

前回低位にあったものの今回集計では上位に來た。ユーフォニアム 3 期も決定しており当面はこの位置で安定するのではないかと予想する。

1.6.4 花澤香菜

前回とほぼ同じ順位である。しばらく前までは上位の常連であったが昨今ではここが定位になりつつある。これからずっとこの位置をキープするのか注視している。

1.6.5 その他

前回、10 位以内だった竹達彩奈、佐倉綾音、早見沙織が大幅に順位を落した。有名声優の場合、メインが多いと反動で大幅低下する傾向がある。次回集計において確認したい。

2 『声優アワード』 Watch Vol.9

-ちょっと面白かった今年の声優アワード-

TCVV 情報管理部 調査課 声優アワード担当

2.1 まえがき

最早、誰に向けてのアワードなのだろうと思っていたけど今回の受賞者は一味違った感じを呈していた。

2.2 受賞者

主演声優賞	安済 知佳、江口 拓也、種崎 敦美
助演声優賞	池田 秀一、置鮎 龍太郎、種崎 敦美
新人声優賞	梅田 修一郎、直田 姫奈、永瀬 アンナ、日向 未南、若山 詩音
歌唱賞	虹ヶ咲学園スクールアイドル同好会
パーソナリティ賞	なし

今回から女優、男優の区別は廃止されたようだ。

2.3 所感

本誌を始め批判の多い声優アワードであるが本年の声優アワードは久々に妥当な線を突いてきた。リコリス・リコイルで好演をした安済知佳が入っていたのは異論は無く順当というところだが、それよりも評価したいのが種崎敦美のダブル受賞である。

主演も脇役もできるという、まさに声優の真骨頂を評価したものと言え非常に感慨深い。

もっとも種崎敦美に関しては以前から評価が高かったので受賞はむしろ遅い位である。

そして、池田秀一という大御所が助演賞に来るとは予想だになかった。事務所も本人も辞退しなかったのが凄い。これまでの声優アワードであれば考えられない。今回を機に今後もベテランが受賞されることを望む。いずれにせよ昨今のグダグダだった声優アワードとは思えない結果である。

それに対して相変わらず新人賞は微妙なところだ。昨年話題になった作品に出ていた人間が受賞しているように見える。定義的には間違っていないがもっと発掘すべき人間がいるのではないかと思う。

いつまで歌唱賞は必要なのだろうか。今回の受賞に関しては、「それしか選択肢が無かったのか？」と思うほどである。しかも、虹ヶ咲学園スクールアイドル同好会に関しては今さら感しかない。いっそ該当なしでも良かったのではないか。

新人賞や歌唱賞はともかく、来年の声優アワードに少し期待が持てるものだという印象を受けた。

3 声優システム論 16-声優たちはどう生きるか-

TCVV 議長

声優システム論とは

現代声優はアニメや洋画に声を当てるだけの存在ではなく社会や経済にも影響を与える存在になり、その動きは一昔前の古典的な声優観では説明出来無い。

そこで現代声優の振舞いを複雑系として捉えることを考え、この系を『声優システム』と名付けた。^{*6}

本論は『声優システム』を様々な角度から考察するものである。

1. 技量別分類

声優を技量に応じて分類すると以下のようになるかと思う。

特 A 群	演じ分け出来て、且つ多数の声色が出せる。
A 群	演じ分けできる。
B 群	棒ではないがこれと言った特徴はない。
C 群	棒声優 (論外)

本分類は自称声優とか VTuber は含まれない。あくまでもきちんとデビューしていることが前提である。

本格的にデビューしているにも拘わらず棒声優はいる。この残念な C 群は正直評価に値しない。論外である。^{*7}

声優として食っていける人々は特 A 群、A 群と B 群の一部であろうと思われる。

いわゆるスター声優は A 群。さらに特 A 群は演じ分けだけではなく、声色のそのものがバラエティ豊かで、同一人物とは思えない演技をする者である。

2. 差別化うまくいってなくない？

従来、A 群においてはさらなる先鋭化を狙って、これと言って特徴の無い者 B 群は何らかの差別化のために歌手デビューや雑誌への積極的な露出やゴリ押しキャスティングなどが蔓延していた。が、最近ではその傾向が減ってきたと思う。

その理由はいくつかあるが業界の構造変化が大きいのではないかと思う。新人声優の一大供給産地となっている響。響はバンドリ、D4DJ といった音楽系作品においてユニット作戦を中心に新人を輩出している。またゲームの影響でアイドルアニメが多く製作されることでグループやユニットでの露出が目立ちソロでの活動は埋もれているように見える。このような状況ではソロで売り出しても成功するとは言い難い状況ではないかと考える。今は個人の差別化はしにくいと思われる。

^{*6} システムたる典型的な例は声優のためにアニメが作られるようになったこと。主従で言えば、従だった声優が主になったという点から見ても『システム』要件を満たしている。

^{*7} 正直、耳触り。どんな基準で監督や音響監督は何が良くて選んだのか小一時間問い詰めた時がある。

さらに差別化の急先鋒だったキングレコードが没落して、かつての勢いが無くなってしまっている。

これまでキングレコードと講談社は強力なタッグを組んで講談社原作のアニメにキングレコード所属アーティストを積極的に入れて来た。しかし、最近では漫画原作よりも WEB 小説が人気になり、結果的に講談社やキングレコードからヒット作も出ていない。キングレコードおおかえアーティストも正直微妙なラインである。そして現状ではヒット作はソニーグループが提供する作品ばかりになっている。

そもそも写真集や歌手デビューは二番煎じ、三番煎じの飽和状態。新規性や話題性に乏しい。受け手は既に飽きている。

3. 声優たちはどう生きるか

競争激化であれば一歩先ん出るため差別化したいところであるが差別化するにももうこれ以上の差別化が不可能なレベルまで飽和しているので費用対効果が望めない。これは声優にとって非常に過酷な状況を物語っている。過去あった差別化の手段が封じられた。今この時点で新たな生き方を迫られ、一大転換点を迎えているのではないと思う。

4. 我々は恩恵を受けている

十数年余りの過当競争により声優全体の技量の底上げが行われて TCVV を創設した頃に問題視していた C 群が大幅に減少し A 群が充実してきた。かつて無いくらいのクオリティになってきている。

この過当競争の恩恵を受けているのは紛れもなく受け手サイドである。正直、何の苦勞もなく恩恵を享受している。

ただ、従前の声優のアイドル化が結果的に声優の質向上になっていたとは TCVV としては皮肉以外に何でもない。

5. 今回のまとめ

- 過当競争により棒が絶滅。
- 業界内の構造変化でキングレコードが没落。
- ソロからユニットへシフトし没個性化。
- 差別化手段の弾切れ。
- 最大限の恩恵を受けているのは受け手側。

4 来たる AI 時代の声優の未来

TCVV 議長

4.1 まえがき

昨年、OpenAI から ChatGPT が公開され世界中が度肝を抜かれた。これを受けて各国、各社が一斉に対話型 AI の開発を始めて、わずか半年あまりで様々な対話型 AI の開発されている。これはシンギュラリティ（技術的特異点）と言っても良いのではないかと思う。

以前、初音ミクが出た時も同様な感想を得た。その際、本誌でも将来的にはボーカロイドが声優にとってかわるのではとの論考をした。

既にハリウッドでは AI を使った CG 合成による映画製作の試みが行われているようだ。俳優はモデリングのためのサンプル撮影を行ない、スタジオや配信会社は対価として 1 日分のギャラのみ支払う。得られたモデルデータはその後にわたって何回も使い回されるとのこと。これが実用化されると俳優は職にあふれるため、反発する俳優たちがスタジオや配信会社に対して地位保全を求めてストライキを起こした。

4.2 声優はどうなる？

ハリウッドの件からも分かるように映画界では着実に実用化に向けて技術開発が進んでいるが音声合成はまだままだ。

初音ミクの衝撃から十数年が経過し、音声合成技術は確実に進歩しているとはいえ映画に耐えるほどのものはまだない。

AI による映画製作の実用化はまず見振り手振りの動きを CG 合成するところが早く実用化されると考える一方でその映像に当てる音声合成は少し先になると思われる。そのため CG 合成された映像に声を当てるための職業声優の需要は一時的に増えるものと予想する。ただそれも一過性によるもので、声の演技を完全に模倣する AI 技術はスグに実用化されると予想される。計算機による演算で十分に演技が再現できるのであれば、『計算機への教師役としての声優』が必要となる。が、必要とされるのは技量の高い者だけであり、その他の職業声優の需要は激減するだろう。

演技はすべて計算機が行うので高度な技は不要である。高度技能により育てられてた AI 声優が跋扈することになる。アニメにも波及すれば声優需要がなくなるので当然のことのように（声優側に軸足のある）『アイドル声優』は絶滅することになる。声のサンプルだけあれば良く、究極的には声のサンプル声は正直、誰でも良くなる。声が誰でも良いなら普通のアイドルでも良くなる。しかも容姿が良い分だけ、職業声優よりも利がある。そう、『声優アイドル』の本格的幕開けである。アイドルが次々と投入されるだろう。

これらを突拍子も無い妄想と捉える向きもあるだろうが、今の技術水準から言えばあり得る想像だと思う。労働人口が減る中、機械化したい向きもある。

実際、アニメの世界ではセル画が殆ど無くなってコンピュータ化されたではないか。セル画が無くなるとは誰も予想しなかったはず。となれば職業としての声優がいなくなることだって全く無いとは言えない。

TCVV 的には甚だ不本意であるが『声優アイドル』が跋扈する未来が見えて仕方がない。

5 Chairman's free talk -議長放談-

TCVV 議長

1. 元祖バーチャル声優

インターネット老人会の方なら元祖バーチャル声優といえば麻績村まゆ子（現：おみむらまゆこ）を連想すると思う。当初、実体の無い CG キャラのバーチャル声優としてデビューした。その後、バーチャルから現実へなったとの触れ込みで実体で登場し、「渋谷でチュ」というアニメ・声優バラエティ番組にも登板し番組製作の OVA へ出演した。そー言えば最近、~~ナナブンノニジュウニ~~似たようヤツがあったような。麻績村まゆ子、今なら流行ったかも。25 年早かったか。

2. ソニーが強すぎる

今や大ヒットアニメはほぼソニーがからんでいて、かつて大手電機メーカーが撤退したエンタメ分野で大成功をしている。しかもミュージックレインを始めタレント事務所、SONY MUSIC などの音楽レーベル、A1 ピクチャといったアニメ製作会社をも傘下に持っている。他が勝てる気がしない。

3. まさかの望月久代

まさか令和の御代に望月久代の声を聞くとは思わなかった。最後に聞いた時から実に 15 年振り。シスター・プリンセスで一世風靡してその後、いくつか主演をした後、全く音沙汰が無かったので驚きを隠せない。

4. 新人のゴリ押し減った？

雨宮天が新人の頃、出ずっぱりの時期があって「また雨宮か！」というのがネット界限であったけど最近は新人のゴリ押し減った感じがする。響（ブシロード）が積極的に新人を供出しているけど特定の新人を推している感じもない。もしかしたら、ゴリ押しを嫌う風潮に付度したのかも知れない。

5. わたしの幸せな結婚が凄い

ストーリー構成や展開は正直微妙だけどキャストと演技は絶妙だと思った。上田麗奈の繊細な演技と息遣い。悪役令嬢役の佐倉綾音のしている側をイラつかせる絶妙な演技。老婆役での桑島法子の安心感。さらに元祖ウイスペーボイスの能登麻美子とのかけあいなど声優的な見どころ満載な作品ではないかと思っている。実写映画もあったようだけど、こちらは残念な感じだったようだ。

6. ミュージックレイン 3 期生の動向が気になります

ミュレ 3 期生について、デビューから 3 年近く経過しているのに、なかなか名前が上がって来ない。2019 年暮れにデビューしたが声優としては IDOLY PRIDE のみ。コロナ禍の影響があったとしても従来のミュレとは違った動きである。いずれ、3 期生もユニット活動をすると思うが知名度が低いままのでユニット結成は過去の例から言っても成功例がないので先行きが怪しい。

編集後記

毎度、本誌をご高覧頂きありがとうございます。

今回はアイドル声優と声優アイドルを中心に編集しました。これらについては本誌でも度々取り上げていましたが総括した内容は今回が初めてです。今後来る AI 時代の未来を予想について本職の声優が声優アイドルに取って替わるという予想はいささか大袈裟な感じはするものの有り得ない話ではないと思います。

声優が完全に AI に替って、声優アイドルが跋扈したとしても演技も完璧であれば我々としても文句はありません。ただ、声優アイドルには「声優でございます」との態度は取ってほしくないと思います。演技の技量は、あくまでも計算機の性能であってアイドルの技量ではないのですから。

AI 関連ついでの話。バーチャルアイドルといえば今でこそ VTuber 全盛ですが、かつてホリプロが同様なプロジェクトを推進していたのを覚えていますでしょうか。その名は「伊達杏子」。当時の技術水準では当初目標を達成できず妥協してよくわからない方向に進んでしまい頓挫することになってしまいました。今思えば非常に先進的な取り組みではありましたが 20 年早かったと思います。ただ難しいのは現代技術の先端を駆使したナナニジですら VTuber としては鳴かず飛ばずだったのでそう単純な話ではないようです。

ナナニジのストーカー報道にて榎本温子が Twitter で自分の頃は声優アイドルではなくアイドル声優と言っていたというツイートをしていました。そりゃそうです。声優アイドルはここ最近の概念です。当時は声優アイドルなんて言葉や概念はなかったんですから。(ちょっと見識が薄いかと思いました)

本誌で毎回連載しているアニメタレント短観ですが相変わらず上位は分厚い中堅層の壁が立ちただかっています。新人がこの中に入ってくるのは一朝一夕では難しいと思います。ただ、10 年前の本誌を読んでも、まさに今と同じように分厚い層がありました。今、上位で活躍している人達はその層を越えて来ました。そこから予想すると現状 20 位から 40 位くらいにいる新人が今後 10 年後に上位に上がって来ることでしょう。月並みな言葉ですが一筋の光はありますが、その光は非常に弱いものと思ってもらえるかと思います。声優を目指す人々にとってはこの事は果たして希望なのか絶望なのか。非常に判断に迷います。

本誌で散々こき下ろしている声優アワードですが新人賞について振り返ってみると、意外とその後活躍している人も結構います。近いウチに声優アワード新人賞受賞者のその後という調査記事を書きたいと思います。

キングレコードが全盛だった頃、この世のアニメはキングレコードに支配されているのではないかと錯覚していましたがスタチャレーベルが無くなった時分にソニーが猛追を始めて今や大ヒットアニメはソニー発のものばかりです。ソニーにはかつてのパイオニア LCD や東芝デジタルフロンティアとどこか同じニオイを感じます。ただ、むかしから盛者必衰の理といいます。ソニーの天下がいつまで続くのか気掛かりです。

本誌は何度か休刊しつつも発刊してきましたが役目を終えつつあると感じています。ここ 20 年で声優の技量は、かつて無いくらいのハイクオリティになったと思います。この原因は本編でも述べましたが一端は声優のアイドル化だと考えています。我々としては正直なところ不本意なところですが、次回以降でこの辺りをより深く掘り下げて解明し、定期発刊の最後を飾ろうかと思っています。それまでは頑張りたいと思います。

それではまた次回。

2023 年 8 月 11 日 TCVV 議長 萱沼真一

TCVV 白書 第 23 号 通巻 27 号

発行 「声優は Visual に出るな!会議」 情報管理部

組版 L^AT_EX2e (Cloud L^AT_EX)

発行日

2023 年 8 月 12 日 (初版)

連絡先

「声優は Visual に出るな!会議」

代表者 萱沼真一

URI <https://www.tcvv.org/>

E-mail info@tcvv.org

Twitter <https://twitter.com/tcvv>

Copyright (C) 2023 The council of ‘Voice actors should not appear in Visual’

